

夢を買った話

むかし、備中の国（今の岡山県）にひとりの郡司（ほやくし）がいた。その子に、ひきのまきひと（ひきのまきひと）というものがいた。

若かったとき、気になる夢をみて、夢うらないの女のもとへみてもらいに出かけた。べつになんともなうて、そのあと世間話をしていると、がやがやと大ぜいの人がやってくるようすである。

見ると、この備中の国司の長男殿（ほやくしのちやうなんだん）のおいでで、二七、八歳ほどの男、性質はわからないけれど、見た目にはなかなかの美男である。お供を四、五人連れて、

「ここが夢うらないの女の家か」

「さようでございます」

などと言いながら入ってきた。で、まきひとは隣りの部屋にかくれ、穴（あな）なんぞをくじつてのぞいてみると、

「こんな夢をみたのだが、どういうことか」

と云って、国司の長男殿は、夢の内容をこまごまと語ってきかせた。女は答えた。

「まことにすばらしい夢でございますよ。あなたさまは、かならず大臣にまでおのほりになられます。なんとまあ、けつこうな夢をこぼになりましたことぞ。」

そうそう。けつしてけつして、この夢を人にお話しになりませぬように」

聞いて長男殿はたいそううれしそうであった。着ていた上の衣をぬいで女にあたえ、そのまま、いそいそと帰っていった。

やがて、隣りの部屋からまきひとは出てきた。そして女に言った。

「夢というものは、横取りできるそうなの。どうだな、あの人の夢を、わたしに取らせてくれまいか。いやいや。ま、考えてごらん。国司というものは、四年たては都へ帰ってゆくお人。けれど、わたしはこの備中の人間。だから、いつまでもここにいる。そのうえ、わたしは郡司の子だから、わたしを大事にしておいたら、おまえさんにもつこうがいいのではないかな」

女はしばらく考えてうなずいた。

「よろしゅうございます。おっしゃるままにいたしましょう。」

それじゃ、さつそく、こうなさいませ。先ほどのおかたとまったく同じようにして、この部屋へ入っておいでなされ。それから、先ほど語られた夢を、語られたとおりすこしもまぢがえないで、あなたがもう一度お語りなさいませ」

まきひとは大喜びで、あの長男殿がしたのとまったく同じように部屋に入り、まったく同じように夢を語った。すると女も、先ほど言ったのとまったく同じことを答えたのである。

まきひとはわくわくして、着ていた上の衣をぬいで女にあたえ、そのまま、いそいそと帰っていった。（なんとまあ、ここまで同じことをしているよ、この人。）

その後、まきひとはひたすら勉強したので、ぐんぐんと学問のある人に成長した。その評判は朝廷にも聞こえ、試験してみたところ、評判どおりたいたいしたものである。そこで漢唐使に任命して、

「唐（たう）の文物をよくよく習ってくるように」と送り出された。

長いあいだ唐にとどまり、さまざまの学問や技術を習い覚えて帰国したので、天皇はまきひとをすっかり信任し、しだいに官職もあげて、ついには大臣にまで任命された。

考えてみると、夢を取るといふことは、なんと恐ろしいことではないか。

夢を取られたあの備中守の子は、官職もつかない身分で終わってしまった。まきひとに夢を取られていなかったら、この人こそ大臣にまでなっていたらうに。

うっかり夢を人に話すものではない、と、むかしから言い伝えているのは、そう、ここなのだな。

（川端康成「宇治拾遺ものがたり」による。）

〔注1〕 郡司＝国司のもとにあつて、その国の郡を治める者。その国々の家族が任ぜられた。

〔注2〕 長男殿のおいでで＝長男殿がいらっしやつて。

〔注3〕 穴なんぞをくじつて＝穴をあけて。

